



鬼の祭典



月海創

筑駒電子書籍文庫

プロローグ

この世界には魔術がある。ちなみに魔法はない。はるか昔に、魔力をたくさん持っていた人が、魔力が少ない人でも不思議な術が使えるようにしたそう。奇跡は起こせないから、魔法じゃない。魔法ってのは、お伽話のようなメルヘンでトリップする世界の話。そういう意味では、麻薬や幻覚剤は魔法かも。

閑話休題。

実際、どれくらい昔に起源があるのかはわからないけど、人の歴史は魔術が動かしてきた。どこかの独裁者が人心を掌握したのも、どこかの小部隊が大軍を退けたのも、みんな魔術のおかげ。使われるたびに、強力に、より楽に使えるようになってきた。そして魔術が一般化し、普及する中、陰陽術、錬金術、死霊術等々、様々な理論が確立されていった。阿部晴明、ニコラ・フラメルがその立役者だ。そしてそんな歴史の裏で細々と発展していた機工術が最近になって脚光を浴びはじめた。そういうわけで、この世界にはさまざまな技術がひしめき合うこととなった。

で、君たちの世界に格闘技と呼ばれる競技があるように、こちらの世界でもそれらの技術で戦うスポーツを考え出した人がいた。そして1929年スポーツとして確立。それが術闘技。その説明は割愛するが、その歴史はより安全に、よりエンターテイメントになるように進化していった。これはそんな二十一世紀の物語。

プロローグ②:日記

4月20日

私の顔には傷がある。

左目のこれは生まれつき。

痛くもかゆくもなんともない。

神社に行くと、なんか疼く。

心の傷は麻痺してる。

両親のいない私。

家族団欒がちょっとだけ憎い。

友達といると、少しまし。

自給自足は当たり前。

スーパーは車で二時間。

風景は山と田圃、それから山。

そんな田舎に一人暮らしで住んでいた。

そんな私は

いじわるな叔母さんの手によって

今日東京に出る。

目の前には扉がある。新しいクラスメイトと仲良くなれるだろうか。ちょっとだけ耳を澄ます。東京ってこんなに人多いの？中からする声の数だけで、去年までいた中学校の全校生徒より多いぞ。電車通学とか必要なところに住まなくてよかった。私は大きく息を吐く。大丈夫だ。友達をとっとと作って、この東京の過ごし方を教えてもらおう。きっと原宿とか、夢にまでみた街で遊んだりするんだろうな。いいなあ東京の高校生。いやいや、今日から私も東京の高校生なんだ。そんな慣れようってのが不自然だ。何故か短い髪が首筋に当たるのが気になる。思考の混乱具合で自分が明らかに同様しているのがわかる。短い髪はいつものことだから、髪が首に当たるのは慣れているはずなのに。名前を呼ばれたので教室の中に入る。ガラガラと――ギシギシじゃないあたり前の学校と違う――扉を開け、教壇の真ん中まで歩く。いち、にい、さん……うっわ、39人もいる。ちょっと多すぎじゃないか？目を閉じて深呼吸。落ち着こう。78の目はちょっとしたプレッシャーだ。息を吸い込んで。

「九鬼鈴鹿です。新年度が始まって二週間という微妙な時期ですが、宜しくお願いします」

教室は静まり返っている。次第に、私の左目に注目が寄り、ヒソヒソと会話しているのが聞こえ始める。やっぱりこれは説明しとかないといけないか。

「この目の切り傷は生まれつきです。気にしないで接してください」

パラパラと拍手。そんなに気になるか……。ふと、後ろの席に座る男子と目があつた。目も髪も黒。満天の星空を連想させるような、遙かに深い闇のような黒、いや玄だろうか。人の奥底まで見抜き、静寂に落とし込むかのような目。なんか気恥ずかしくなり目を逸らしてしまった。もう一度見たら、既に窓の外に目を移していた。

「じゃあ、九鬼は一番後ろの空いている席に座ってくれ」

私はうしろまで歩いて行って、席に座った。左にはさっきの黒の男子、右にはなんか既視感のある男子。なんかにこやかに手を振ってきている。記憶のなかから必死に探し出す。誰だったか……。

「海原阿散？」

「よかった、覚えていてくれたんだね」

海原阿散、こいつの実家は私の以前いた村にあったせいで、夏休みや冬休みによく私たちと遊ん

でいた。知り合いがいるのは何よりも心強い。私はとりあえずため息をついた。問題はこっちの男子なのだが。振り向いたところでまた目が合う。

「えっと、鷹羽韋安、です。イアンでいい。宜しく」

「あ、えっと、宜しくお願いします」

目がめっちゃ泳いでいる。女性慣れしていないのか？彼はまた窓の外に目をやってしまった。地味に手が少し湿ってたな。

先生は必要事項を面倒そうに言って出て行ってしまった。授業前にトイレくらいは行きたい。と、机に手をついたとき、女子たちが席を立ち、私を囲む。いや、阻んできた。

「何県から来たの？」

「彼氏とかって居た？」

「どうして引っ越すことになったの？」

「血液型は？」

「どんな魔術使うの？」

その他諸々、強烈な質問ラッシュ。東京って怖い。それでいて、私の返答を聞くより前に他の女の子と話す。なんでそこまで話が続けるのだろう。そこまで話が続けるのは掲示板だけかと思ってた。

「で、どこのグループ入る？」

全員が会話をやめ、私を見る。突如、静寂が生まれる。え？ 話聞いてなくてわかんなかった。グループって何？

「おーい、女子ども、そんなグロテスクな風習押し付けてんじゃねえよ」

海原の助け船は泥船にすぎなかった。

「はあ？ 男子にはわからないだけでしょ？ まあ、イケイケで他校の女子とカラオケ行くよう

な海原には殊更わかんないでしょ」

「で、前いた学校ではどんなグループにいたの？」

「全校で三人だったから、グループも何も……」

圧倒的な沈黙。

「ジョーク？」

「マジ」

やっちゃまったという、重い沈黙。いや、それほど大変なことでもないけど。きっと東京では重要なことなのだろう。ああ、自身の乾いた笑いが耳に付く。

先生が入ってきて、女子の塊がどっと散った。やっぱり思った。東京って怖い。なんかそりが合わないというか、仲良くなれなさそう。

次の休み時間からは女子たちは私に寄り付かなくなった。反応を窺うかのように、ちらちらと視線を送ってくる。たしかに、それも気にせず、アプローチをかけてくる人もいた。だが、何故か陰湿さと狡賢さが透けて見え、あまり好色を示せなかった。

そのせいで、四時限目、私は疲れ切っていた。

「お疲れのようだな、九鬼」

「教えてよ、海原、グループって何？」

「女子同士で友人たちとつるんでいるやつ。大きければ大きいほど言論の強さがある。他のグループには排他的な妙な慣習だよ。そんなにグループがヤだったら、別にグループに入らなくてもいいだろ。どうせ部活入ってから、そいつらと仲良くなったりするんだから」

「部活かあ」

なお、以前いた中学校にはそもそも部活という概念が存在しなかった。漫画やアニメでは知っていたが、そんな積極的に入りたいと思うものでもない。それで異次元にでも飛べるのならば大歓迎なのだろうが。ふと、ネットでみたあるものを思い出した。

「術闘技の部活はない？都会だと一般的な部活らしいけど」

海原の目が光った。

「あるよ。それも複数ね。表面には出ないスクールカーストに少なからず関わってくるから、名前だけ所属させている人もいる」

一息。

「学校内の試合だったら、最低1チーム三人、外部との試合をやりたかったら、4人居ないと、術闘技部は認められない」

海原は身を乗り出す。口角を釣り上げて、悪巧みをたくらむかのような顔。

「で、オレの『モビー・ディック』に入らねえ？新しく新設するんだけど、人が足りないんだ」

「え、何その名前ダッサ。それ、「白鯨」のあのクジラでしょ？というより、生理的にあんたと同じチームに入りたくない」

凄まじく肩を落とす海原。「オレはもう負けだ」なんて小声で呟いてる。その時、肩を叩かれる。振り向くとさっきのイアン。真剣味溢れる真顔。見透かせない深淵の黒眼。

「『ケイブルグラム』……は？どう？」

「……うん、そっちの方がカッコいい、入るんだったらそっちに入りたいな」

突如、イアンが笑った。フツと微かなものだった。笑ったか笑ってないかもわからないほどのものであった。

「海原、五百円だからな」

「酒の名前に負ける悪魔の名前って……」

状況がつかめなかった。紙を取り出していろいろ書き始める海原。

「どういうこと？」

イアンは虚空を見つめながら

「これだけ言っておく。俺と海原が違うチームだとは一言も言っていない」

「君はイアンのチームに『入りたい』と言ったからな」

「聞こえ良く言って、『君は騙された』、3人目のメンバー君」

海原はひらりと紙を私に見せる。「部活新設申請書」。さっきの言葉を思いだす。

『学校内の試合だったら、最低1チーム三人』

メンバーリスト、部長、海原阿散、副部長、鷹羽韋安。それと私、九鬼鈴鹿。

術闘技部「ケイブルグラム」。

軽々と私は騙された。

「にて、海原、今日は暑いな」

「そうだな、気温が高くもないのに汗が出るね、イアン君」

「理由はわかるか？」

「そうだな、よくわからないが……」

四時限目、終了の鐘が鳴る。

「逃げよう」

二人して、椅子から転げ落ちるようにドアへ走る。私はまずイアンを沈めるためにラリアット。地面から80 cm、イアンは潜り抜けた。地面すれすれまで身体を倒して、走り抜け、海原に続いて教室を飛び出した。予測していたのかと疑いたくなるような反応速度。舌打ちして私も、二人の後を追う。昼休み、廊下に生徒があふれ出す。あいつらがどこに向かうのかわからないが、とりあえず追いかけて、あの紙を奪おう。ちょっと必死な鬼ごっこの始まりだ。

男子二名は生徒会室へ走っていた。部活申請は生徒会に出さないといけない。

「イアン、あいつ追いかけてきてる？」

「いや、今のところ見えない。人が多いだけかも。油断はよくない」

なんであそこまでキレルんだよ、と海原は愚痴をこぼす。海原は決めていたのだ。高校生になったら新しいチームを作ろうと思っていたのだ。しかし、イアンは捕まったが、あと一人がなかなか入ってくれなかった。だからこそ、知り合いが入ってくれたこの機会は逃してはいけない。ふと振り向いた。イアンは後ろを監視しているが、何と巧妙なことだろうか、九鬼はイアンの死角を走り続けている。

「イアン、人の後ろだ！」

九鬼が大きく飛び上がり、壁、天井と続く。そして、頭上から拳を振りかざして振ってきた。眼に強烈な殺気。廊下の喧騒を止めるほどの迫力。俺たちは遠ざかるように大きく飛び下がる。衝撃音が響き渡る。九鬼はゆっくりと体を持ち上げる。

「その紙をよこせ」

と、どうせ言ってんだろう。申し訳ないが、相手が足を止めたのならば、俺たちの足は動かし続ける。あいつの目標は走って逃げるが、オレ達の目標は逃げはしない。学校内の魔術の使用は基本的に、教員の許可無しには禁止。強化は使えないが、全力で逃げることはできる。

廊下は走ってはいけません。ましてや、暴力をふるうような場所でもありません。決して真似しないでください。私たちは生死をかけて必死です。

一階、生徒会室の前につく。九鬼の姿は見えない。あいつはこの学校の地理をまだ把握していない。つまり、視界から一度でも消えれば、オレらの勝利。

「勝ったな」

「ああ」

なんか感慨深い。生徒会室の扉を強く大きく叩く。扉を開けると、片山^{じゅんこ}盾子生徒会長が本から目を上げる。長い髪がサラリと耳から落ちる。眼鏡の奥に、逆光でも煌めく目。いつも思うが、年上の色香に満ち溢

れている。同性愛者の噂がたっている人だが。

「部活新設申請書です。術闘技ですが」

「別に既存の部活と内容が同じで拒否はしないわ。書類を貸して」

手に持つ書類を渡す。ゆっくりと彼女の目が書類上を走っていく。そして、ごそごと生徒会印を取り出してポンと押す。

「はい、承認しました。顧問届出は一週間以内ね。これ、来月の校内大会のお知らせ。参加するならもうすぐ締切だから、気を付けてね」

お知らせを受け取る。

「それと」

彼女は大きく息を吐いた。

「このかわいい子はこの、九鬼鈴鹿ちゃん？」

会長の後ろ、グラウンドに面した開いた窓、鬼の形相の少女が降り立った。会長は書類を手にしている。九鬼は手を振りかざした。

「やめろ！」

九鬼じゃない、先輩にだ。笑いながら先輩は一言。

「騎士の誇りよ。名となり壁となり盾となれ」

間はない。

「パラディンシールド、肩部展開」

ガインツ、激突音が響く。九鬼を隠すようにそびえたつ巨大な十字の盾。会長は肩から外し、手に握る。反動で仰け反る九鬼に対し、

「大丈夫、保健室送りにはしない」

弧を描き、巨大な盾が振るわれる。校庭へ、九鬼は吹っ飛んだ。先輩は盾をなでながら、「炸裂装甲の方がよかったなあ」などつつぶやいている。振り返り、手に持つ紙をひらひらさせる。

「承認」

有無を言わせぬ。微笑みだった。

「よかったな、承認されて」

「それでも内部大会しか参加できないけどな。人数ギリギリだから一人でも抜けたら即廃部だぜ」

「とにかく、あいつを引き留める名案を。海原、期待してるぞ」

俺たちはいろいろ今後のことを話しながら教室に戻る。で、悪魔は確かにそこに座っていた。校庭まで吹っ飛ぶほどの攻撃を喰らったにかかわらず、ぴんぴんしてやがる。俺たちの姿を目視するや、口元で笑い、ゆらりと立ち上がる。悲しきかな、目が笑っていない。説明義務と、あいての言い分を聞かなくては。ここからは折衝タイム。目の前に奴はそびえたつ。逆光あまって恐怖百倍。

「よくも騙してくれたな」

「あのだn」

背中に強烈な衝撃。投げられた。慈悲のかけらも与えられない。イアンの身体も続いて空を舞う。なんか、あいつの口の端から煙が出ているように見えるんだが……。とりあえずそそくさと土下座する。

『おい、イアン、お前も』

『お、おう』

「「辞めないでください、お願いします」」

長い沈黙、怒気の圧力が感じ取れるようだ。クラスメイトの前だが、誇りも何も言っていない状況じゃない。そして、溜息が聞こえた。

「なんか勘違いしているでしょ。私は、チームに入ることがヤなわけじゃないからね」

オレとイアンは同時に顔を上げる。仁王立ちする九鬼の顔は呆れ顔。スカートの中は短パン。クソッ、色気も何もあったもんじゃねえ。なんで短パンなんだ、せめてスパッツだろうそこは。

「海原、アンタの考えていることだいたいわかるよ。……私がキレてるのは、騙したこと。術闘技部に入ろうと思ってたし、別に大きな部活じゃなくていいし。仲のいい女子だったら他の場所で作るし。ただ、アンタと同じ部活ってのが、やっぱり生理的に少し嫌だけど」

最後の一文は聞こえませんでした。はい、聞こえませんでしたよ。だが、これで、こいつが辞めることもないということ。小さくガッツポーズする。夢の、チーム結成。名前は気に入らないが。

「要求は一つだけ」

イアンとオレは、どうぞなんなりと、と姿勢を伸ばす。後悔する、心の中でそう思いながら。思えば、こいつは悪魔のような奴だった。八重歯むき出しに九鬼は笑う。

「歯、食いしばれ」

音が二つ、教室に響き渡った。

やってしまった。クラスメイトの前で力に任せてしまった。皆の顔がドン引きしている。「うわあ何この田舎者、なんて野蛮なの」と、みんなの顔が語っている。目の前の二人ときたら、殴ら

れているのに嬉しそうだ。「鈴鹿、クラスで浮いてるってよ」うん、ベストセラー間違いなしだな。映画化してもいいのよ。イアンと海原は姿勢を伸ばして

「「ありがとうございます！！」」

どっちについてありがとうございますなのか。私はため息をつく。転校初日、災難の連続だ。

放課後。

「で、術闘技のフィールドが見たいんだけど」

私が言うや否や海原が、めんどくせえという顔をする。ぶん殴りたい気持ちをぐっと抑えて笑みを浮かべる。自分のこめかみがひくひく動くのがわかる。まだ教室だ。落ち着け、殴るなら体育館裏。見えないところでぼこぼこにするべき。

「私、格闘技での一对一のコートしか見たことないから、多対多のフィールドくらい見たいんだけど」

「でもオレ、今日、合コンなんだけど」

首を絞めてやろうか。チームメイトにコートも見せないのか。手がわなわなと震えてくる。

「学校のフィールドは今日は他のチームが使ってるだろ。あれは予約制だし、この学校には二つしかない。同じ大きさならこのへんだと、市営アリーナの小型フィールドが空いていると思う。いいよ海原、俺が連れていく」

聖人・真顔のイアンである。私は椅子の足の一本を軸にクルリと振り向いて、両手でイアンの手を包み込む。

「無能のクズとは大違いだね！」

「おい誰が無能だ」

背中への投げかけを無視して、スクールバッグに勉強道具を放り込む。急いで立ち上がり、教室の入り口へ走る。かなり広い空間を戦闘の場として使うと聞いた。ビルなどの障害物もあるらしい。くう、胸が高鳴る！大会で優勝する姿を想像したら、変な笑いが出てきた。

ところで、うわの空で廊下を走るのは危険だ。

「ッ、どっわ」

人とぶつかった。私はたたらを踏んだだけで済んだが、相手は盛大にしりもちをついた。ガオンと大きな音が鳴る。見たところ、相手が背負っているのはギターみたいだ。もといいた村では見たことがなかった。どうしようかと思って、とりあえず手を差し伸べる。払われる。叩かれたことに驚いている私を横目に相手は立ち上がる。身長は158 cmくらいだろうか。172 cmある私とは大違いだ。目深にニット帽をかぶり、パーカーのフードを同じく深くかぶっている。制服はスカート。うん、女子。そして、その奥から睨む眼は『暗闇の炭火』を連想させる。背を向けて、小声で

「……ザけんな」

すたすたと歩き去った。小さい体でありながら、声は私より低い。私が呆然と立ち尽くす中、海原とイアンが追い付いてくる。そして、目線の先のギターケースを見て海原の顔色が変わる。

「あれってゴブソンじゃねえか。あの人にぶつかったのか？」

「え？う、うん」

「いや、向こう様がなんも言わないならいいけど。あそこのギター滅茶苦茶高いのさ」

海原は乾いた笑いを漏らす。イアンを見ても肩をすくめるだけ。非常にやばいことみたいだ。向こうがなんも言わないなら、別にいいと思うのは楽観的過ぎだろうか。

「とりあえず行かない？」

二人は黙ってうなずいた。

市営アリーナまで歩いて十五分、バスを使うほどの距離でもないのに、三人並んで歩くことにした。なぜか海原もついてくる。

「海原、合コンじゃないの？ 私、強制はしてないからね？」

「はあ？ あんなの案内が面倒だからのとっさの言い訳に決まってんだろ」

きつと私はこいつをぶっ叩いていい。そんな声が心の奥から湧き上がる。イアンを見たら、やめとけという風に首を横に振る。海原は言葉を続ける。

「それよかお前はなんで引っ越すことになったんだ？」

「……叔母だよ。両親がいないからって、東京の高校に転校させやがった。生活はギリギリだし、遺産権利だけ大量にとっていきやがって。『養育を負担しますから、遺産の少しは分けてくださいます？』とかのたまって、三分の一以上。一人暮らしさせながら、何が養育だ。さらには私の取り分の遺産も管理とか言って、自由にさせてもらえないし」

愚痴だけがあふれ出てくる。肩を両側から叩かれる。

その顔は同情の眼と嘲笑いの眼。とりあえず嘲笑う方を軽く突き飛ばす。つか、イアンはあまり顔のパーツが動かないけど、目の奥見れば感情がわかるのね。私はなんとなくこの二人が理解できてきた。

海原阿散は自分の庭で権力濫用するタイプ。しかし、人の庭に踏み込んだ途端、いつも通りに振る舞って、そこの主から被害にあう。で、学習しない。それでありながら、爆発力があるのは昔知っている。

鷹羽韋安は基本真顔。海原に向ける顔にたまに本心が混じる。だけど目と仕草が滅茶苦茶に内心を語る。で、イケメン。印象は恐ろしいほど黒い。

「私は大丈夫。とりあえずアリーナ行かない？」

無言は肯定。私はイアンを促し、アリーナへ向かう。木々に囲まれて公園の真ん中の道を通り抜ける。木漏れ日が道の煉瓦を輝かせる。ランニングをする人、遊ぶ子供、歩くカップル、下校する高校生たち、それぞれの時間が流れる昼下がりだった。その時、木々の隙間に大きなギターケースとフードを見つけた。あの子、ここで何してんだろ。

「おい、九鬼、そっちじゃねえ。こっちだよ」

海原に呼ばれて、あの子を追うのをやめた。

促された先は、大きな体育館のような形をしていた。確かに大きいけど、こんなところで運動や戦闘するくらいだったら、野山で遊んでいたほうが開放的で楽しいだろう。

「ちっちゃいなあ」

「内部拡大魔術があるんだよ。この大きさだけど、イアンが全力ぶっ放しても壊れないくらいは丈夫だよ」

「ゆうてそんな俺の全力は強かないけどね」

「イアンはどんな魔術使うの？」

「……時が来たらわかる」

さすがに隠すか……。実際、見るときは来るんだから焦らなくてもいいか。使用者の見た目と使う魔術は意外と合致しない。真っ黒なイアンでも、魔術はそこそこスタンダードな部類じゃないだろうか。海原は水を使うやつだった気が……。だめだ思い出せない。三年以上前のことはそんなに覚えていない。

自動ドアを入ると爽やかな風が吹き付ける。まだ早いと思うが、涼しいのはきれいじゃない。人が何人かいてにぎわっている。コンクリート製のこんなに大きな建物は村には無かった。

「じゃあ、申込みしてくるからその辺で待ってて」

イアンは受付の方に歩いて行った。私は海原と並んでソファに座る。カップルに誤解されないように、人一人分隙間を開ける。

「このあとどうすればいいの？」

「イアンが鍵貰ってくるから、それでアリーナに入る。外部接続を切っておくから、オレらの魔術見せるよ。驚くこと間違いなしだよ」

海原がスッと手を伸ばして髪を撫でてくる。

「それにしても、お前綺麗になったよな」

背筋がゾクツとした。やめろ！気持ち悪い！心拍数が上昇する。助けを求めるようにイアンを目で探す。海原の向こう側、肩に書類を担ぎ、蔑むような目を送るイアンが立っていた。

「あ、えと……お帰りイアン」

飛び退くように海原が姿勢を正す。海原の冷や汗がやばい。

「いや、九鬼を口説こうが、俺には関係ないからな。ああ、関係ない。どうぞ海原、ご自由に続けていいぞ」

彼の心情は推察可能だ。そんなに人前で恥かくのがヤだったのだろうか。私は居た堪れなくなってソファから腰を上げる。ソファの形がふわりと変わり、海原は腰を伸ばす。海原は振り向きながら必死に口を動かす。

「えと、あの、ご、ごめん、実際そんな気は無くてだな、えっと」

「何を謝っている。自身でやっていることはいいか悪いか考えて行動してんだろ。だったら俺に謝る道理は無いよな」

「……」

困窮する海原は遂に黙り込む結果となった。罪悪感の蛙は激怒の蛇に睨まれる。ただただ無言が海原の背中に押し掛かる。やり場のない視線を彷徨わせていると、大学生らしき三人の男性が目に入った。こっちを見てニヤニヤしている。どうも嫌な感じだ。

「そうだ、とんでもないこと言うけど驚くなよ」

イアンは言う。

「3 on 3の初試合だ」

沈黙が訪れる。二度訊く。二度同じ答えが返ってくる。

「練習なし？」

「なし。練習したきゃ勝て」

イアンが書類をポンと渡してくる。対戦相手：法澤大学生男子三人。時間制限：一時間。フィールド：アジアンスラム。勝者報酬：二団体分の使用時間。敗者罰則：二団体分の使用料金の75%の支払い。フレンドリファイア：無し。ペインアブゾーバー：Lv.5。ずいぶんとFPSみたいな設定表だな。

「いや、イアン、なんで試合なんざ受けやがった？オレたちはまだ始まったばかりのチームだぜ。大学生相手に勝ちが見えないんだが」

「ああ、それはこうこうことだ」

~~~~~

「あー、すみません、小型フィールド開いていますか？」

「はい、小型ですね。アジアンスラムが一つ空いていますね。でしたらこちらの用紙に必要な事項を記入して提出してください」

で、俺は机で参加する人の名前を書いて、使用希望時間書いて出しに行こうとしたんだよ。そしたら横からやつらが割り込んできて、

「すみません、小型フィールドを。はいこれ申請書」

「おい、こっちが並んでいただろ」

「早い者勝ちだろうあきらめろ」

かっとなって声荒げてさ

「ふざけてんじゃねえぞ、柵乗り越えて割り込んだのはどいつだ。人が少ないからって許されねえんだよ」

ここで受け付け嬢、参戦。

「対戦したらどうですか？」

~~~~~

「簡潔でわかりやすいな。いや、そうじゃない。それに賛同したのか」

「いいじゃねえか、負けても払う金額が1.5倍になるだけだろ。どうせ市営な上に、三人割りだからそんな高くないだろ」

二人が口論している間に私は大学生のところへ歩いて行く。女子の私が入っていると知って奴らは急に姿勢正し始めた。すっと前に立つ。私の身長は170あるが、見上げるということは180はあるだろう。

「どうしたのかなお嬢さん」

「私、先週東京に上京したばかりなんです。術闘技の勝手もわからないので、ハンデとしてどんな魔術使うか教えてくださいませんか？」

ちょっと声のトーンを上げて小首をかしげる。ネットの掲示板で、男子が好きな仕草と書いてあった。これで勝つる！

「いいよいいよ、オレはね、強化魔術。基本的に足で蹴って戦う感じかな？」

「俺はボクシングやってるし、拳と腕に強化掛けて爆破でドッカーンって」

「僕は遠中距離で炎撃ってウザがらせ役。この前、ほかの大学と練習試合したとき、ストライカーが全員キレて一齐に飛びかかってきたよ」

このシューターだけ気にかけて、ストライカー二人は行けそうだな。三狩りできそう。上京した田舎者でも、ネット環境はあったんだよ。つまり、「勝手に知らないといったな。アレは嘘だ」。情弱ではないのだよ。東京人、覚悟しろ。

「ありがとうございます！頑張って対策しますね！」

スマイルは出す側も無料。テレテレする三人に背を向ける。足使いが受けで炎使いが攻め。確定だ。イアンと海原の元へ戻る。まだ口げんかしてやがる。術闘技の話から大きくずれて、プリン食べたの云々言っている。ほんとどうでもいい。二人の肩を叩いて

「落ち着いて。作戦立てなきゃいけないでしょ」

「……元はと言えばお前なんだけどな」

「肯定したくはないがオレもそう思う」

こいつら、責任を押し付けようとしてる。それぞれ一発ぶち込んでやろうか。鍵の番号を確認する。101-9、1階の端の方。それでも騒ぐ二人。仕方がないので右手でイアンの、左手で海原の襟をひつつかんで準備室に引きずり込む。奥の扉を開ければアリーナとやらに行くのだろう。やっぱりいつも思うけど、魔術の発達って素晴らしい。二人を準備室の壁に叩きつける。女子の片手で高校生の男子一人を壁まで投げられるのかって？それは……私だから。

「まず、アンタたちの魔術がどんなんか聞いてないから、戦略の立てようがないんだけど、教えてくれる？」

「……ゴリラ」

つぶやいた海原をギッと睨みつける。随分と失礼なことを言ってくれるものだ。これでも乙女なのだから。それともあれか？お前の魔術はゴリラに変化することなのか？

「オレは水に魔力込めて、それを媒介とする瞬間移動。対象はいまのところ自分と肌に触れている物だけだけど、他のものも動かせるように研究中」

「俺はただ魔力込めるだけ。強化でもなんでもない」

イアンから思いもしない返答が返ってきた。イアンの本気がアリーナを壊す等言っていたから、どんなものかと思えば。内心が顔に出てしまったのだろう。イアンが溜息を吐いて、床から立ち上がる。

「そうだな……ちょっと魔弾を撃ってくれないか？すぐにわかる」

「ちょっと待って、私は魔弾撃つの苦手なの。海原がやってくれない？」

ゆっくり海原は立ち上がって、指先に数多の魔弾を生成する。

「普通の連射でいいよな？」

イアンは無言で頷く。直後、海原の手から立て続けに魔弾が出る。準備室が凄まじい明るさになるが、イアンの前で魔弾が消えていく。イアンの腕に黒いものが纏いつき、当たる魔弾を片端から消している。腕の速さは鍛えれば凡人でも達することのできる速さ、つまり、強化もしていないのだろう。唐突に海原が魔弾を撃つのを止め、そこにはあまりにも珍しい魔術師、一千万人に一人の魔術師が立っていた。

「……マイナスの魔力？」

「御名答。俺はこいつだけで魔術を対処して、後は格闘技でどうにかしている」

「じつはこれ半分も出してないんだぜ。全力使うと、周囲の魔術機器は止まるし、魔力生成物は跡形もなく消えるからなこれ」

もともとオーラとして有色の魔力を纏うには多大な魔力を必要とする。それこそ緊急防御で無理やり魔力を纏う以外オーラなんて出ない。なのに、漆黒の、深淵の闇のような黒が、イアンの腕から肩を越えて炎のように揺らめいていた。ぐうかつこいい。確かにこれは強い、強いのか？よくわからん。初めて見るし、動画でも見たことない。でも、魔力生成物も無効化できるって、世界壊滅大術式魔導：アルマゲドムでも生き残れんじゃん。あ、アルマゲドムって、アメリカのMASAが公式会見で言い間違えたからそんな名前なんだってね。

勝てそう。あの炎使いの炎も打ち消せて、爆発使いも無効化できる。あとは、こいつの格闘技の技量に依るところだが、問題Nothingだろう。申し訳ないが、この二人にあの人たちの使用する魔術を解説して対策を立てよう。

「あのだね、使う魔術を訊いてきたのデスヨ」

「ナイス。さっそく教えて。対策立てないと奴らには勝てないだろう」

解説。

ストライクレッグウィザード

「近接脚技師が少々不安だけど、何とかかなりそうだな。お前の言うように、イアンを前に立てて、一人つぶしてから、一気に」

「でも、相手が俺のことを理解した瞬間に、攻略されないか？」

「それは、その時だ」

私は事前に考えるのは得意じゃない。いままでも、数多の道場破りを帰らせた私の、戦闘センスは伊達じゃない。事後思考で何とかなるさ。加えて少し作戦を加える。イアン前衛、海原と私がストライカー。

と、扉に手を掛けた海原が振り返る。

「お前はどんな魔術を使えるんだ？」

無言で、閉じた右の目を、人差し指で二度叩く。海原は、つかえねえ、と言っているが、実際ここは驚く場面だ。極々珍しく、まともに戦闘に利用可能なコレはその中でも少数だ。作った魔術式をトレースしても、失敗して視力を失う者がいる中、私は未だ鮮明な視界を持つ。激レア魔術「魔眼」。眼球そのものに魔力を載せることで、一定の効果を得るもの。人によってはレーザーみたいなものを撃つことができる人もいるそうだ。私はただ「見る」だけだが。

げんなりした顔で海原は扉を押す。こいつのこの顔、後悔させてやる。そう決心して、私たちは光に包まれた。

初戦闘

噓せ返る様な湿気と、即座に汗の湧き出す妙な暑さ。埃臭さと、腐った木の香り。凸凹に連なるコンクリートの屋上に、トタンの家が立ち並ぶ。海の香りのする風と、微かに上がる砂煙。遠く離れたところに扉が現れ、さっきの大学生たちが出てくる。

即座にイアンが走り出す。飛んでくる炎弾を打消し、距離を詰めていく。その後ろを私たちが追隨する形だが、少し誤算があった。この空間は魔力によって生成されている。つまり、イアンの魔力と引き合う。それによって前方に魔力を寄せているイアンは、本来の速度より前方へ加速する。私たちと想定よりも少し大きく距離が開く。残り距離10m、ここで相手が大きく動いた。イアンが急に止まったので、横に飛び出る。状況を確認すれば、イアンに、爆発使いが肉薄していた。まずここで私と海原のどちらかが出ていないといけなかった。まあ、イアンでもやりようでは勝てる相手だとこの時は思った。

大誤算その1、イアンは魔術生成物が「周りに及ぼす影響」は打ち消せない。爆発使いは、イアンの目の前の空気を爆発させた。空気が破裂しただけだが、脳震盪を起こしたのか、イアンは動いていない。イアンの魔力は雲散霧消する。爆発使いは、拳をイアンの額に密着させ、ポパン。

イアンの立っていた場所にはLOSEの文字。

なんで、速攻で負けるんだよ。よりもよって、防護壁が一番に消えるなんて。私と海原は左右に走り出す。炎弾の打ち手は一人。つまり、二手に分かれれば片方はフリーのはず。

大誤算その2、相手は炎弾使いだけじゃない。誤算というよりも戦略ミスだが、私に爆発使いが並走する。炎弾は海原を追っているようだ。私の上から、隕石のような拳が降ってくる。防御魔術を使いこなせない私が当たれば即死である。だからこそ爆風を利用する。引き、回り、走り、跳び、また走る。巻き上がる砂埃。攻撃するタイミングをうかがうものの、高速の拳の壁に阻まれる。足場のタイルは爆発で砕けていく。これでは海原の援護に当たれない。ふと違和感が頭をよぎる。何かを利用すれば倒せるんじゃないか？視界の端で海原を捕らえる。向こうも向こうで、凄い戦いを展開している。

放り投げるビンで、瞬間移動するものと、相手の魔術を吸収するものがある。使ったビンで魔弾を吸収し、その魔力で瞬間移動を繰り返す。存外チート臭い戦法だ。相手の後ろへ瞬間移動し、数撃打撃を加えてまた逃げるを繰り返す。ヒット&アウェイの理想形だ。炎弾使いはストライカーを苛立たせるどころか、苛立たされている。その時、炎弾使いの炎弾を撃つ手の形を変えた。拳を避け、叫ぶ。

「海原！離れろ！」

忠告空しく、海原が宙に放っていたビンが、炎弾で砕かれた。炎弾を二発連続で撃つ状態にしていた。一発目が吸収されても、二発目で砕く。正しい判断だ。そして海原は、その場から瞬間移動はできない。相手のすべきことは落ち着いて身体を狙うだけ。

LOSEの文字が出て、海原は消えた。

「よそ見してていいのか？」

慈悲は無く降り注ぐ爆発の鉄拳。体を反らし、後方へ避ける。爆発使いの拳が宙を掻く。やっ

とだ。言ってしまうえば、海原はいてくれていたほうがいい。囿になってくれるのだから。しかし、いなくなったことで利点がある。

炎弾使いが足を止めてくれた。

正拳突きしてくる爆発使いの拳に、両足を載せる。足を覆う爆発の衝撃と熱気。間違いなく火傷を負って、打撲もあるだろうが、消えたのは靴だけだ。大きく背面宙返りを飛びながら、向かうのは炎弾使い。奴が気付いた時にはもう遅い。一息ついたところに、宙から刺客。逃げられるような道理はない。炎弾使いの肩に着地する。我ながら獣のようだが、思考はいたって冷静である。

首を折ってしまうえば即気絶だ。

私の足元にLOSEの文字が現れた。手を打ち、乾いた音を鳴らす。

「まず一人！」

私は極めて、多対一が得意な格闘家だ。ここにいるのは笑みの消えた爆発使いと、最初の場所から動かない近接脚技師、そして、口元に嘲笑の浮かぶ少女が一人だ。近接脚技師、なめてかかっていたのは間違いだったな。次に潰すべきは爆発使い。はっきり言って、衝撃波もダメージが来るってのは厄介だ。意外な距離を爆発で詰めてくる。明らかに近接脚技師が強いからこそ先に、潰せるとわかる方を退場させたい。

だから私は背を向けて走り出した。1テンポ遅れて、追隨の蹴音が聞こえる。二つ。なんということか、近接脚技師までついてきてくれた。私は全力で走る。向こうは魔術強化のかかった脚だろうが、私の素の脚力は10貫を背負って100mを17秒で走ることができる程度だ。話にならない。だからこそ、こんな開けたところで勝負を挑むべきではない。広い視野で必死にソレを探す。跳び、越え、滑り、走る。目的のものが見え、そちらへ方向転換する。そして私は、屋上の床に張られた板張りへダイブした。1か所違和感を放っていた通り、そこはもともとコンクリートだったのが崩れ落ちたような場所だった。本当に、漫画に出てきそうなスラム街の仕組みだ。その建物の最上階は窓まで板張りされ、今入ってきた穴が、せめてもの明かり取りとなった。真っ暗の階層の中、なけなしの魔力で強化魔術を構成し、喉元と横隔膜へ添える。そして息を大きく吸い込む。爆発使いと近接脚技師がその天井の穴から降りてきた。

シャウト。

その階全てを震わせる、轟音。床から巻き起こる埃で部屋は包まれ、壁にひびが入る音がかすかに聞こえる。扉の板張りが吹き飛び、窓枠がギシギシと唸る。私は足元のワイヤーを拾い、片方の影の、首と思しきところに引っ掛け、締める。

もう一つLOSEが増える。もう一人の肩に飛び乗り、再び屋上へ出る。案の定、近接脚技師がその穴から飛び出してきた。

「すごいね。もう称賛しかあげられないよ。この手際には」

「そりやどうも。まあ、か弱い無知な乙女とかじゃなくてごめんね」

「そんなのどうでもいいさ。マイナスの魔力とか驚いたけど、そんな対処できないものじゃないね」

「それはこっちの誤算。私は結構な不意打ちだと思えてた。なんか訊きたいことある？」

「フレンドリファイア無しだったのに、あの階で土門……あの爆発使いの彼が粉塵爆発使うとは思わなかったの？」

「魔術による攻撃は通らないけど、それによる爆風や衝撃波はダメージとして通っちゃうんでしょ？それなら、あそこでは使わないだろうと私は考えたから」

「なるほど、追って中に入ってしまったオレの失態だったというわけだね。じゃあ、次の質問。その身体能力って素の身体能力？」

「一応。強化とかは一切使ってない。正確には、使うのが下手だからあまり、ね。さっきのシャウトにはさすがに使ったけど」

「うっひゃあ、凄まじいね。どう鍛えたらその境地まで達するんだよ。おっと、今のは質問じゃなくて感嘆だから。で、最後の質問」

間。

「その真っ赤な目はどんな魔眼なのか教えてくれる？」

「……無理」

向こうが一気に身体を低くする。クラウチングスタートの構え。それに応じて私も身体を低くした。膝を曲げて脚を前後に開き、掌を胸の高さに。

「じゃあ、そうそう油断はできないね！」

彼の脚に力が入った瞬間、右足を数センチ持ち上げ、踏み下ろす。震脚、屋上が碎け落ちる。湧き上がる埃と砂の煙。相手は踏み込む足場をなくして姿勢を崩した。私は即座に逃走する。隣のビルに飛び移ると、彼も思い切り飛び上がって追隨する。強化した脚はやはり強力だ。

風を斬る脚。本能で後退する。響く、響く、踏み込む音と斬撃音。一步二歩と、高速の斬撃を避けていく。さらに速度が上がる。避ける。避ける。髪に掠ることはあっても、決して肌に触れさせない。

足の斬撃を止め、私を睨む。私は、薄く笑いを浮かべてその目を見据える。そして彼は問う。

「何が見えている？」

私は何も答えない。

脱落者待合室で、四人はその動きをモニターで見ている。九鬼の軽やかなステップで、すべての攻撃を避ける様子を見て、ただならぬ何かを感じていた。海原は顎に手を当てて考える。赤い魔眼ということは、赤色スペクトルの光として魔力が漏れているということ。残骸として漏れる魔力のエネルギーが低いということだから、エネルギーの高い魔力を残らず使い果たしているということにつながる。つまり、そんな純度とエネルギーの高い魔力を余さず欲するような術式を目の中に保有していることになる。それほど精密な術式が眼球に刻まれているのなら、肉弾戦やゲリラ戦に持ち込むより不可視の魔力など貫通して使える、魔眼の攻撃を使ってしまうのが一番だ。どんなに保有する魔力量が低くとも、追尾で貫通で間違いなく一撃で倒せる。じゃあ、どうということだ？

「何も答えないなら、もう一段階上の攻撃に入らせてもらうよ」

奇妙な曲線を描く両足の蹴り。だが、「見えている」。よけて避けて、避ける。ただただこの

広い空間に二人の、吐息が聞こえ、消えゆく。玉のように流れ出る汗。今、視界にあるのはこの男の、鋭き脚技のみ。

突如、視界に汗が入った。いつもならば音でどうにかなるが、今の相手は格闘家じゃない。魔術師である。

「ちょっと待って、今、目に汗入っちゃった」

胸骨へ、螺旋をいれた風を纏う蹴りが容赦なく炸裂する。

大きく吹っ飛び、数回屋上の床を跳ね、屋上の端から宙へ投げ出された。息が吸えない。地面まで目測35m程。どうやっても助かる見込みはない。その時、一階の壁を突き破り、奴が飛び出してきた。両足に炎のごとく、狼の形の魔力を宿らせている。落ち狩りだ。手を、足を振り回すが体の向きは変えられない。

そして、その時は来る。

「月光喰い尽す風来の餓狼・ベアウルフ」

音速を超える垂直蹴り上げ。

九鬼の体は大きく宙を舞った。

海原はなおも考えていた。

いや、もしかして、逆か？高エネルギーの魔力を使うのが目的ではなく、低エネルギーの魔力を外に纏うことが目的なのだとしたら？それで何の効果が得られる？低エネルギーの魔力を可視化できるほどの膜状に張ることができたなら、何が見える？

海原はふと気づいた

「あいつ、アレが見えているのか」

顔を上げたとき、モニターに映っていたのは、宙を舞う九鬼の姿だった。

もうあの少女は立ち上がれない。どうだろうとオレの勝ちだ。ズザ。着地した音がする。ホントにすごい奴だったよ。魔術なしであそこまで行けるものなのか。オレも習練が足りないな。しかし、いくら待てどWINの文字が出てこない。いや、理由は明確だ。だが、頭がそれを受け付けない。恐る恐る見据えた先には、四肢をしっかりと地に着いた少女の姿があった。彼女はゆらりと立ち上がる。笑っている。オレはちょっと笑えない。

「聞こうか。なんで助かってる？」

「攻撃を受ける直前に身体を全力でこわばらせて、攻撃を受ける瞬間に全身を脱力させるの。いくつか関節は脱臼するけど、まあ助かったし。あと、重心を打ち抜かせないように頑張った」

目の前が真っ暗になりそうだった。そんな芸当など早々できるものじゃない。それをこの子は、あの落下で成し遂げたというのだ。勝てるだろうか？いや、今研究中の技ならワンチャンスある。オレも被害を受けるが、そんなに我儘言ってもらえない。勝つことでオレは一步成長しなくちゃならない！

「で、思考は終わり？」

私は言う。

「ひとつ教えてほしい」

オレは問う。

「魔力が見えているんだな」

「御名答」

驚いた。私の魔眼をこんなにも早く見抜くなど、やはり大したものだ。だからこそ私は名乗る

「海原流戦闘術十二代目当主、九鬼鈴鹿」

彼は笑い言う。

「流派なんぞないけれど、犬吠大牙。一介の大学生だ」

風が吹く。

「「いざ、尋常に！」」

二人は走り出した。

「で、負けてちゃ意味ないだろうが」

「サーセン」

海原の前で私は正座をしていた。なんのことはない。名乗った5秒後に負けただけだ。踏み込んだ足の膝をまた踏み込んで蹴りを繰り出すとかいう、不意打ちの連続のような技を、受け身も取れない状態で脇腹に受けてしまっただけなのだ。先に負けた二人にはあまり文句を言われたくないというのも本音なのだが。

私たちは仕方なくやや多めの金額を払ってアリーナの外に出た。もう夕方で、空は赤くなっていた。

「一応フィールド出るときは、入った時と同じ状態に戻るんだね」

「昔は治療班とか常設必須だったんだけどな。これも技術の進歩ってやつなんだろうな」

公園の中を三人並んで歩いていく。時刻は四時半。まだ帰るには少し早い気もする。きょろきょろと公園の中を見渡す。ベンチにギターを持っている人が座り、その周りに子供たちが座っているのを見つけた。

「何かの演奏かな？」

走り出す。ある程度走ってから、足を止める。下校時にぶつかった相手だった。踵を返そうと思う前にフードの下から目があった。少女は子供たちを軽く追い払って、近づいてきた。

「このギター、あなたのせいで音がへんになっているのだけれど」

彼女が手に持つギターの下の方に、微かなひびが走っていた。生憎私はそんな修理にどれだけかかるのかわからない。しかし、私の財力じゃ払えないということはわかる。海原が近づいて、ギターを見てぎよっとする。

「あのだな、こいつは今貧乏でな、そんな大金払えなくて、えっと」

必死でフォローしてくれているのはわかった。しかし、このギターはそんなに高い代物なのか。まじまじと見つめる。彼女は溜息を吐く。

「別に弁償はいいよ。ただ、悪いと思っっているなら願いがある。わたし、さっきの試合、モニターで見てたんだ。あなたたちのチームに入れてくれない？」

気付いた。声が少し笑っている。一步、イアンが出てきて、彼女のフードを弾く。途端に、輝くような銀髪が露わになった。

「お願いがあるならフードを外せ。それと、髪にコンプレックスがあるなら気にするな。そっちの方が綺麗だぞ」

なるほど確かに綺麗な髪である。ざっくばらんに短髪な私と比べてもうらやましい限りだ。そこでさらに気づく。目が完全な赤。俗にいう、アルビノだ。初めて見る。改めてみてみれば、現実のものとは思えないほどの美しさだ。天は二物を容赦なく与える。彼女は微笑を浮かべる。

「……あなたがそう言うなら。わたしは白^{しら}有^{あり}安曇^{あづみ}。使う魔術は、完全に教育指導要領内。だけど、魔力の量は尋常じゃないから」

そうやって差し伸べた手を私はにぎって、笑って見せた。